
鈴歌、異世界へ

梨緒（元ブライトハート）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴歌、異世界へ

【Nコード】

N8601Y

【作者名】

梨緒（元ブライトハート）

【あらすじ】

それはどこか遠い星の話、そこに地球人が入ってしまった。そんなお話です。

~~~~これは「異世界旅行へ」の書き直し版です。初見の方は「異世界旅行へ」を見ない方が楽しめるかと思われます。はい。よろしくおねがいします。

## 始まり（前書き）

ブライトハート改め梨緒です。  
書き直し版、投稿いたしました。

結構違った物語になりそうな予感がしてなりません。

## 始まり

事の始まりは母のK4の中。

「ねえ、お母さん」

「ん？」

「お母さんは、異世界ってあると思うっ？」

母は少し考え込むように唸り、  
そして言ったのです。

「信じればあるよ」

~~~~~

祖父の家へ向かう車の中、自分は若干車酔いになりつつ携帯ゲームを。

ティリリン

(よしっ)

それは育成ゲームでハマるとことんハマるという評判の良いものだ。

「ホラ、鈴歌、そろそろゲームやめて。おじいちゃんの家見えてき

たよ」

「はあい」

ちなみに言つと祖父の家は超のつくド田舎で、家の裏には山がある。昔は自分もよくそこで遊んだものだ、と思い出した。

（そうだ、どうせ暇だし行ってみようか）

ゲーム機の電源を消しながら思う。

ここらへんはジ　リの「となりのト　ロ」の登場人物が住んでそう
なところだ。

静かで空気がよく、川の水も冷たくて美味しい。

そんな中で幼いころの自分は育ったのだ。

都会へ出たのは小学４年生のときだったか。

今では並んで一番前だったが、すっかり背も伸び、後ろから数人ほどだ。

昔が懐かしい

そこでふと、幼いころの記憶が蘇る。

（これは、なんだ？）

まだ見たことのない、モノ

（なんでここにあるんだろう？）

この世のモノとは思えない、ブツタイ

どこか違う星から来たと思ひ込んでいたモノ達・・・。

幼いころの自分は“異世界”を信じていた。

今は亡き父が小説家でファンタジーモノを書いていたせいもあって

かどうかは分からない。

ただ、気づいた時には母に聞いていた。

「異世界ってあると思う？」

きつと考えるようにしていたのは父を思い出したのであろう、と思った。

そして母はきつぱりと

「信じればあるよ」

と、車のエンジンを止めながら言った。

エンジンが止まったこと、それを自分は何か運命が変わる、扉の開ききったことを知らせる音に聞こえたのだった。

始まり（後書き）

更新はチマチマやっていきたいと思imasuので、
今後ともよろしくおねがいいたします。

森の祠（前書き）

ストーリー変えるっていったし大丈夫・・・。

森の祠

祖父の家に入ると、昼ごろに着くと言っていたからか昼飯が用意されていた。

ちなみに祖父の料理だ。

本人に聞いたところ昔ホテルの料理人をしていたそう。

祖母はというと何年か前に亡くなっている。

寂しいからかどうかはわからないが、ちよくちよく自分の家電にかけてくる。

今日もそんなところだ。

「ごちそうさま」

「はいよ」

昼を食べて挨拶をする。

食べ物は粗末にはいけない。

作ってくれる人に感謝を、そして命あるものを頂くわけだから当たり前のことだ。

今の季節は夏。

と、いつでもそろそろ寒くなり始めてもいい頃だ。それでも暑いから扇風機の前に陣取る。

「風こないから正面に座んな馬鹿！」

・・・怒られた。

縁側に出てみる。

目の前には小さな庭があり、祖母が好きだったキンレンカが咲いている。

花言葉は愛国心、困難に打ち勝つというものがあるらしい。

観賞用だけじゃなく、食用花でもあると祖母から聞いたことがある。

キンレンカを見ていて思い出した。

森に行こうと思ってたんだった。

「お母さん、おじいちゃん、ちょっと森に遊びに行つて来るー」

「気をつけなさいね」

「行つてらっしゃい」

財布と携帯とゲーム、ティッシュとハンカチなどを入れた大容量リュックを引つ捆んで玄関に行く。

靴は歩くのに適したスニーカーだ。

カラカラと戸を閉めて歩き出す。

家の裏手に回ればすぐ森だ。

案の定、木が生い茂つた森が見える。

下からも草がぼうぼうに生えているのでわしわしと掻き分けながら進む。

もっくもっくと進んでいく。

森から山に変わったようだ。

踏み固められた山道が。

「んー・・・やっぱ上に行きたいよね」

やや上り坂を歩く。

しばらく歩く。

もくもくと歩く。

「だるい」

はつきり言つと自分はめんどくさがりだ。

だからこんなチマチマ歩いているのが嫌になった。

と、いうわけで

「よし、そのまま上っちゃえ！」

身体の向きを90度変えて、いざという時のために隠れて持つてきたおじいちゃんの軍手を出す。

装着。

いざ、出発。

山道には背の高い草は見当たらないが、急斜面のこちらは草伸び放題だ。

さすが森というか山というか。

熊でも出るんじゃないだろうか、といまさら心配になる。

（まあ、大丈夫だろ）

気楽に行こう、気楽に。

2、3時間経って頂上が見え始める。

「いよつし！ちとここらで休憩しようか・・・ん？」

座れる場所を探しキョロキョロとあたりを見回すと。

「・・・祠・・・かな」

そこにあつたのは祠、祀っているものが分からないが、シンプルな昔の家をちっちゃくしてみました。みたいな感じだ。

供え物は何も上がっていない。

見たからにはなんか供えて行こうかな・・・と、リュックをあさる。

ポテチと爽健美茶が。

ちようど良いやと祠の横に座り、ポテチと爽健美茶を少しずつ残して飲み食いする。

「んで、ここに置いて、と」

ポテチを数枚と、爽健美茶のペットボトルのふたを開けたままそこに置く。

そしてポテチの袋を小さくして持ってきてあつたゴミ袋に入れておく。

（ポイ捨ては良くないしな）

よいしょと立ち上がりズボンについた草を払う。

そしてまたガサガサと草を掻き分けつつ斜面を登った。

1時間ほど経って頂上についた。

この山は登山客も来るため、頂上のあたりの木は切られている。見晴らしがよく、キリツとした空気が気持ちいい。

その景色を携帯で写真を撮り、空気を堪能してから下山した。

気分良く夕食を食べ、風呂に入り、布団に横になる。

意識が遠退くには時間はさほど掛からなかった。

森の祠（後書き）

ポイント、感想など下されば幸いです。

行ってきます（前書き）

読んでいただきありがとうございます。

行ってきます

夢を見た。

くく

あゝ眠いなゝ

カーテンを開ける。

「ん・・・!？」

様子が昨日と違っている。
ビックリして引きつる口元、笑う膝。

「え、え？タンマタンマ、え？ちょっとまってもらえますか、あの」

誰もいない部屋で誰にも答えられない問いをする。
静寂に包まれた部屋がささやき声で包まれた気がする。

こそこそ・・・
ざわざわ・・・

苦しい、息がし辛い。
居心地も悪くなる。

なんで？
ここドコ？

わけも分からないまま、意識が飛ぶ。

〃

という、夢です。はい。

起きたときズザアッって部屋の隅に移動しちゃったよ、反射的に。
おかげでベッドからは落ちるし、落ちたときの音で一階の母から怒
鳴られるし・・・
なんなんだもう。

でも、

分かっていたのは昨日の祠へ行かなければならないということだっ
た。

一階に下りて朝食を食べているときにふと気づく。

（昨日、異世界はあると思うかと聞いたときの違和感、
そして母の言った言葉、夢、
何度も行っていたはずの森（というか山）に見知らぬ祠があったこ
と。

こんな偶然が起こりえるのだろうか？）

自分してみればよくもまあここまで推測できるんだ、という具合
である。

まっさかあゝとか思いつつ、テンションが上がる。

(・・・ちよつとまてよ?)

祠へ行かなきゃないのは分かる、早く行けと自分の中の何かが急かしているから。

でも、それで、もし、「異世界」に飛ばされるとしたら?

関係ないが実をいうと読書家だ。

家の自室には図書館並みの本棚が3つあって、壁一面本だらけつていう感じである。

さらに言うとなンタジーものばかりである。

それらの本から考えれば、異世界に飛ぶ、ということは無いと言
い切れなくて

(言い切れない、言い切りたくない)、やらねばならないことがある
のも分かった。

もしも、のために。

手紙を書いておく。

何も無くて帰ってこれたのなら恥をかくが、用心することに越した
ことは無いだろう。

ほかには、キャンプなどで使えそうなものを探す。

(ちなみに、祖母が花のなんちゃら会で野宿するということがしよ
つちゅうあつたらしく、

必要そうなものは大体そろっているはずだ。)

「おじいちゃん、おばあちゃんのキャンプセットみたいなどこに
あるかわかる?」

美味しい料理をほおばりながら目の前で自分を眺めている祖父に聞

く。

「美智子さんの？ああ、あるけども、どうした？」

「いやー、何も言わず出してくれるとありがたいです」

「ふむ・・・」

無理か。

「お前さん、昨日変な夢を見たかい？」

「え？」

唐突な質問にビビる。

その態度はイエスと言っているようなものだった。

「そうか・・・。」

「え、そうかって・・・ううん？」

「旭、美智子さんとお前に引き続き、お前の子供もか！」

え？

「も」？

なんだっていうんだ、まったく。

（ちなみに旭は母、美智子は祖母の名前である）

母がどうしたの？といった風に自分たちのところへくる。

「変な夢をみたそうだ。」

「はあ・・・。」

「そして、お前昨日“祠”を見ただろう」

「うっ・・・」

それから説教じみた口調で祖父と母から説明を受けた。
要約するとこんな感じである。

・祖母と母も自分と同じように祠を見つけ、供え物をし、変な夢を見た。

・祖母も母も何がなんだかかわからず、何も言わず、持たず、祠へ行つて飛ばされた。

・聞いた話によると祖母の母もその母も、こんな風にして飛ばされ、戻ってきているらしい。

・自分くらいの年頃にそうなるらしい。

・ちゃんと察して野宿用品を求めた自分は偉い

・・・え、何、ここの先祖、異世界の住人だったんですか。

自分は啞然とするほか無かった。

だって、まさか憶測がちよっと違うがあってるってナニコレ

「鈴歌もなるの・・・」

つぶやくように、母。

「いいわ、行きなさい。」

決心するように。

「帰ってこないと承知しないわよ？」

泣き笑いの顔で。

ただ、自分はトクイのヘラツという笑い顔を見せ、準備を始めれば良いということを察した。

（エライぞ、自分、空気読んだ）

母の顔にもらい泣きしそうになりながら、必要なものなどを聞きつつ準備しつつ。

そして昼を迎え昼食を食べ、まったりお茶を飲みつつ話し。

祠まで来る事になりました。

心細いもんね。

スニーカーを履いて、靴紐を結びなおして、荷物を持って。

自分たちは祠を目指す。

どこにあるかは、心の中に地図があってその場所が光っている、そんな感じで分かっている。

会話も無く歩いていくと、前方に目的の場所が。

「ついたよ。・・・もしかして見えない？」

見えないらしい、キヨロキヨロしている。

「私たちには見えないのねえ・・・でもなんだか懐かしいわ」

母はそういつて、ふふ、笑った。

そして自分の首にかけていたネックレス（？）をはずして、自分にかけてくれた。

「お守りよ、次に会うときに返してね」

約束をひとつ。

そして祖父が言う。

「お前が戻ってくるときにはわしは死んでると思うからのう、元気でな」

そういつて、はっはっはっ、と笑う。

「じゃあ、行つてきます、ばいばい」

どうすればいいかは分かっている。

祠の中に手を入れればいいのだ。

なにが入ってるか分からない、小さな祠のドアみたいなのをあけ、手をつ突っ込む。

直後、身体を襲う浮遊感、意識は、飛んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8601y/>

鈴歌、異世界へ

2011年11月27日10時47分発行